

学位記授与式 式辞

やわらかな春の日ざしが降りそそぐ中、ここまなび野の桜の蕾も膨らみはじめ、新しい生命の息吹を感じる季節となりました。

皆さん、ご卒業おめでとうございます。宮崎県立看護大学は、只今、第 23 期学部卒業生 100 名、第 6 期別科助産専攻修了生 15 名、第 21 期大学院博士前期課程修了生 1 名、第 15 期大学院博士期後課程修了生 2 名、計 118 名の皆様に、卒業証書、修了証書、学位記を授与いたしました。

本学の教職員を代表して、心からお祝いを申し上げますとともに、皆様のこれまでの努力に深く敬意を表します。

また、皆さんの学びを物心両面で支えてこられた御家族や関係者の方々にも、深く感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

さらに、本日はお忙しい中、^{こうの}河野 宮崎県知事をはじめ、多くの御来賓の皆様に御臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、学部卒業生の皆さんが入学された 2019 年は、平成から令和へと新たな時代の幕開けの年でしたが、その年の 12 月には中国で新型コロナウイルス感染症が発生し、翌年の 3 月には WHO（世界保健機関）がパンデミック宣言を行い、世界に激震が走りました。

皆さんは、この 3 年間、新型コロナウイルス感染症が世界的に拡大する中で、感染症の拡大防止を行いながらの学生生活を送ることになりました。

そこでは、休校を経験したり、校内に入ることも叶わず、自宅で遠隔授業を受けることも多かったと思います。また、実習やサークル活動さらには大学祭等も思うに任せない学生生活だったことでしょう。

このような時期を長く経験されただけに、本日、この佳き日を迎えることができましたことを、心から喜ぶたいと思います。

しかしながら、その様な状況にあったからこそ、皆さんは、普段何気なく見過ごしていた、たくさん大切なことに気づき、多くのことを学ばれたのではないかと思います。

当たり前であった何気ない家族や友人とのつながりが、自分にとってどれ程かけがえのないものであったか、改めて認識されたことでしょう。

少ないながらも、同じ時間と空間を共に過ごす仲間と語り合うことで、多くのことを学び、知識を吸収し、自分のものとして身に着け、成長することができたと感じられたのではないかと思います。

さらに短い期間ではありながら、病棟や地域での実習で、看護の対象の方に直接かかわることもでき、対面して直接触れることの重さも実感されたことでしょう。

しかし一方で、私たちは戦争を知らない世代ですが、この 21 世紀において、1 年前にロシアのウクライナ侵攻が始まり、平穏な日常が一瞬にして失われることを目の当たりにしています。

そしてこの 2 国間の対立が世界の多くの国へも影響し、地球規模の政治の在り方や日常の経済にも深刻な状況がもたらされてきていることを体験しています。

さらに、今年の 2 月にはトルコにおいて巨大地震が発生し、壮絶な被害を起こし、地球規模で様々な予測困難な事態が発生しています。

様々な努力はなされているのですが、如何ともしがたい現実には、無力感を感じざるを得ません。

このように日常の大切さを学びながらも、一方ではいとも簡単に平穏な日常を失うことを体験し、先行きが不透明な時代に社会人になる皆さんは、これから先も予測困難で、想定外なことに多々遭遇することと思います。

そのような時は、これまでの価値観やものの見方に囚われることなく、様々な情報を十分に吟味し、自分の考えをしっかりと持ち、仲間や先輩と話し合い、その時々合った最善の対処の仕方を共に見出し、難関を乗り越えていかなければなりません。

また、世界の人口は昨年 80 億人を突破し、貧困や飢餓の発生、環境への負荷が大きな問題となっております。

一方、日本では、出生数が 80 万人を割り込み、人口減少対策が喫緊の課題と

なっています。そこで国は、この 4 月に新たに「こども家庭庁」を発足させ、深刻な少子化に対策を講じようとしております。

今後、母子保健、母子福祉対策の充実を図っていく上では、看護師をはじめ保健師や助産師の果たす役割は、ますます重要なものになります。

皆さんは、このような時代におきまして、これからの日本の未来を担う若者として、また看護の専門職として、その活躍が大いに期待されています。

本学で学んだことに自信と誇りをもち、そして広く世界にも目を向けて、看護や保健の分野で中心的な役割を担う専門職として、また、新しい価値や新しい仕組みを生み出す社会の一員として歩んでいかれることを心より祈念し、私の「はなむけの言葉」といたします。

令和 5 年 3 月 16 日

公立大学法人 宮崎県立看護大学 学長 平野かよ子